

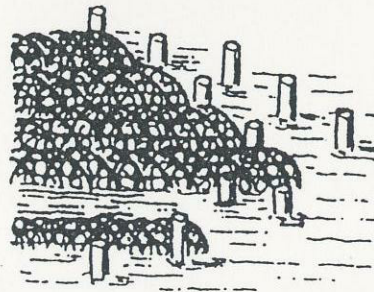
## 用水路を守ってきたおじいさんの話



代わってわたしが出かけたこともありました。女ではハンドルがなかなか回らなくて困りました。足がすくわれそうでしたよ。



くぐり穴を通して、水が毎日同じように流れていくのは、取り入れ口のところの川をせき止めているからです。今はコンクリートでせき止めているので、大雨がふってせき止めが流されることはありませんが、昔は大変でした。石をならべて積み、上にささの葉をはって、むしろをかけて、つなをまわして「じゃかご」を作りました。100kgぐらいの石を背負って運び、積み上げました。それでも大雨のときは、増水した水に流されることがありました。やっと流れないようにしたのは、針金で「じゃかご」を作ってからです。コンクリートのせき止めになったのは、つい最近のことで10年もたっていません。



わたしは、38才のときから28年間、「堰守」と言ってくぐり穴用水路を守る仕事をつとめました。「堰守」の仕事で一番大切なのは、くぐり穴を流れる水の調節です。特に、大雨がふったときは、必ず出て行かなくてはなりません。あるときは、ふだんは流れていない「さま」から水がゴゴと音を立ててふき出していたこともありました。このままにしておくと、くぐり穴がいたんでしまうし、田にも水が流れすぎてしまいます。そこで、水を七北田川にもどすために、堰元の水門をしめたり、西泉の水門を開けたりして水量を調節します。水圧でハンドルが重くなり、回すのが大変でした。ゴゴと流れる水に立ち向かうのは、本当に命がけのこともあります。でも、稲や用水路を守るためにがんばってきました。今は、若い人たちがあとをついでがんばっています。

春には、みんなで取り入れ口や「さま」のあたりのごみ取りをします。水がもれそうなところは、ビニール袋に砂をつめたもので修理するんだよ。



大堰ができて日照りには勝てない。七北田ダムもなかった昔は、泉ヶ岳の水神まで雨ごいに行ったこともあったなあ。川底の石をどかして手で水をすくって流したこともあったっけ。